セッションＪ「ポーランド問題とドイツ生存圏の思想」事後報告

報告：鳴子博子（岐阜聖徳学園大学）、谷　喬夫（新潟大学名誉教授・非会員）

司会・討論：野村真理（金沢大学）

世話人：鳴子博子

セッション開催に直接的なきっかけを与えたのは、谷喬夫の『ナチ・イデオロギーの系譜―ヒトラー東方帝国の起原』（新評論、2012）の刊行であった。セッションはヨーロッパにおける中心と周辺の「グレイゾーン」に位置するポーランドをめぐり、独仏から発せられた真逆の方向（国家の拡大と縮小）と正反対の論拠（文明による野蛮の克服と文明史観への批判）を有する２つの思想を取り上げた。１つは、１９世紀に汎スラブ主義、ポーランド・ナショナリズムに対抗すべく高揚したドイツ東進イデオロギーの聖典とされるトライチュケの『ドイツ騎士団国プロイセン』（1862）の思想である。もう１つは、１８世紀後半、列強による分割の危機に直面したポーランドに対してルソーが示した『ポーランド統治論』（1770-71執筆）の思想である。以下の２つの報告は各２５分で発表され、続いて司会と討論者を兼ねる野村真理（『ガリツィアのユダヤ人―ポーランド人とウクライナ人のはざまで』人文書院、2008の著者）が２０分コメントし、その後、フロアとの質疑応答、討論に移った。参加人数は約１５人であった。

１．鳴子博子「ルソーの戦争論とヨーロッパ秩序構想―戦争論とパトリ連合構想からＥＵ統合を

考える」

現在、ＥＵ、なかでもユーロ圏は、ギリシャの経済破綻に示されているように危機に直面している。報告はルソーの戦争論を用いて、なぜユーロ危機が起こり、どのように進行したのかを明らかにしようとする。大戦終結直後のヨーロッパ統合の起点には、領土戦争（資源を有する土地の奪い合い）を阻止する企図があった。もちろんその意義は大きいが、ルソー的な視座からは、その「平和」は力による停戦であり、戦争状態に他ならず、領土戦争を過去のものとはみなしえない。さらに、拡大するＥＵの内外で武力によらない経済戦争（現代化された経済戦争）が激化しているが、ユーロ圏は現代化された経済戦争を阻止できておらず、むしろその展開の場となっている。報告が戦争論の先達ホッブズではなく、ルソーの戦争論を援用するのは、ユーロ圏の誕生から現在までの経過を、ユーロ圏という「新国家」にヒト－ヒト間の戦争状態が生じ、国家が瓦解する「過度の腐敗の結果」としての自然状態が出現するプロセスと見て取ることができるからである。また、ルソーの「事物の力」と「立法の力」を≪戦争状態へ向かう力≫と≪戦争状態を阻む力≫と捉えると、国家の統合の真の目的は、「見える手」（立法の力）によって「見えざる手」（事物の力）の暴走を是正することにあるとみなされる。ヨーロッパ統合の原理は、「見える手」（立法の力）を手放さない自立国家間の連合であるべきであり、現行のＥＵの統合原理は正される必要があることになる。

　次に、統合再編のヒントとして、ルソーのパトリ連合構想が検討される。ルソーがポーランドに対して示した危機脱出の第１の処方箋の第１段階は、自主的な国土縮小か分割によって主権を持った再編国家＝パトリをできれば３３、少なくとも３、生成する国家再編強化構想であった。国土縮小、分割によって、政府を同国人の見える範囲に置き、人民の直接立法による「見える手」に可能な限り接近させて、経済戦争に抗する力を獲得するのである。第２段階は、縮小、分割されたパトリ＝国家（「自己愛」国家）が、外部の「利己心」国家の侵略に、独立したまま連合して対抗する再編パトリ連合の構想である。（第２の処方箋としてルソーは、魂の内なる祖国の存続を図って国家消滅に耐える現実的な処方箋も語っている。）第１の処方箋は、まず１つの地方が国家となり地方主権を実現し、次にそれらの小国家が連合する国家連合の提唱であると報告者は捉える。連邦国家構想とみる解釈との論争点がここにある。最後に、スイスの小国家論としてＪ・ブルクハルトとルソーの小国主義を対比し、その差異を確かめた上で、ルソーのポーランド構想と小国主義から、ＥＵは連邦国家ではなく自立国家（パトリ）連合となるべきであるとの結論を導き出した。

２．谷　喬夫「ドイツ東進イデオロギーとトライチュケの騎士団国家論」

　本報告は報告者の２著作『ヒムラーとヒトラー』（講談社選書メチエ、2000）と『ナチ・イデオロギーの系譜―ヒトラー東方帝国の起原』とに基づいて行われた。

報告が意図するのは、第１に、ヒトラーの東方支配構想に至るドイツ民族の生存圏の思想が、１９世紀ドイツ・イデオロギー、なかでもトライチュケの騎士団国家論とどのような連続線を有するかを明らかにすること、第２に、ヨーロッパ・キリスト教共同体における中心と周辺の問題をグレイゾーンにあるポーランドから考えることである。

１９世紀ドイツでは、ナポレオン戦争の勝利と１８４８年革命の挫折を経て、スラブ・ナショナリズムの高まりに対峙、対抗して、ポーランド分割を正当化し、東方スラブ世界＝野蛮を文明化することこそドイツの歴史的使命であるとするイデオロギーが生成される。中世の平和的に行われたドイツ植民と暴力的に形成された騎士団国家の事実の上にドイツの東方支配を正当化し、英・米・露の世界帝国論の影響を受けて、東方­­＝ドイツの生存圏であるとの主張が展開されていった。

　帝政右派からヒトラーまでイデオロギー的聖典とされるトライチュケの『ドイツ騎士団国プロイセン』の成立の背景には、シェンケンドルフやアイヒェンドルフに代表されるドイツ・ナショナリズムの高揚があり、Ｊ．フォイクトによるマリエンブルク資料集成があり、東方開拓の先駆者＝騎士団とブランデンブルク公国とをイデオロギー的に統合して、プロイセンをドイツ統一の旗手として歴史的に正統化する政治的意図が存在した。

　ドイツ騎士団は、プロイセン軍国主義および官僚制を歴史的に正統化する役割を果たし、文学的効果を発する騎士団国家の英雄とその悲劇は、来るべきドイツ統一の旗手の模範となり、騎士団→ホーエンツォレルン家→フリードリヒ大王→ビスマルクと続く、ドイツ東進の使命とプロイセンの歴史的正当化、東進イデオロギーの完成を促した。

　最後に、ヴァイマール・ドイツにおける失地回復運動と「東方研究」（M.Burleigh等の研究）およびヒトラーの東方支配と「東部総合計画」から、騎士団国家イデオロギーとヒトラーの媒介について解説して報告は締め括られた。

３．野村真理コメント

　野村会員が歴史研究者としてコメントされた主要部分をまとめると、ドイツにとってのインドはポーランドであり、ポーランドにとってのインドは東方であって、ポーランド自体、東方へ向かおうとする膨張志向の歴史も持っていたことが指摘された。ルソーの論ずる国家は、生産力と人口とが静的に均衡する農本主義的な国家である。他方、現実の歴史の進展においては、人口爆発があり、静的な均衡とは異なる動的な変化が起こり、飢餓、海上封鎖、食糧不足に直面したドイツは、国家としての生き残りを賭けて自前のブロック経済を展開した。こうした現実にルソーの理論は、果たして有効なのか。さらに現代に目を転ずると、国家の数は増加しており、小国家化、分裂は、（理念ではなく）現実の現象である。しかも現代の食料と工業の関係を見ると、グローバル化の中、自給自足的ではない経済が展開している。９０年代以降、地域統合への参加が進み、国際的なレジームの構築の重要性が高まり、レジームの中での大国の役割もますます増大している。国際的なルールづくりに「見える手」を対峙、対抗させるのでよいのかという批判、疑問が鳴子報告に対して提示された。

４．フロアとの質疑応答

　細見和之、黒須純一郎、平子友長の各会員から質問があった。まず、細見会員は、鳴子報告がＥＵに向かうのはわからないとの疑問を呈した。その上で、ポーランド自体が膨張していたし、ユダヤ人問題はルソーが執筆していた時には出てこず、民族が出てくるのは後の時代であるとの指摘がなされた。それに対し、鳴子はルソーの立法者論にはヌマ、リュクルゴスと並んでモーゼが登場すること、ルソーにとってユダヤの民が大きな関心の対象になっていた点を説明した。

　黒須会員は、経済思想史の立場から、鳴子報告のスミスとルソーの対抗関係の捉え方に異議を表明し、スミスの立場を擁護された。さらに国家が連合した時の一般意志はどうなるのかという点も問われた。黒須会員もＥＵまで考えない方がよいとされた。鳴子からは、ルソーの理論に依拠して、１８世紀から現代をつなぐ説得力のある議論を展開するには、立論の積み上げが必要であることは痛感するが、ルソー論からＥＵを論じることの意義は十分あると答えた。

　平子会員は、谷報告が長年の思想史研究に裏打ちされた実り豊かで精緻な報告であることに敬意を表したのち、１つにはヨーロッパの内部と外部を、もう１つはナチズムをめぐる継続性と特殊性を問題にされた。１点目は、外部を持たないとやってゆけないヨーロッパ、植民地問題であり、２点目は、国家の膨張、ナチズムの世界史的で構造的な暴力の継承者としての側面とナチズムの特殊性の問題の指摘であった。

　討論の中で他に、鳴子は、生産力視点を有する自国産業の自立的発展の理論として捉え直して、ルソーの農本主義的国家像を刷新する必要のあることを主張した。

最後に、セッションを振り返ると、トライチュケとルソーの思想の「交差の時期・空間」の絞込みにやや難があったように思われる。ポーランドを問題にする以上、１８世紀後半と１９世紀後半を中心としつつ、第三帝国期が視野に入るのは当然ではあるが、大会報告集のセッションの趣旨にＥＵの問題を取り上げる予告をせずに、鳴子報告がＥＵにまで戦線を拡張したことがフロアの理解を得にくくする原因をつくったことは否めない。この点は鳴子の反省点である。

ＥＵの外部にあって生き残る小国スイスは、多言語国家であり、金融のみならず精密機器産業に見られるように自国経済の確固たる自立性を確保している。スイスの「国家連合」は、現行のＥＵに対してオルタナティブたりうる。セッションでは、スイスの「不一致の一致」から得た着想がルソーの一般意志論形成に大きく寄与している点を説明する余裕が鳴子になかったが、この場をお借りして、「不一致の一致」モデルが、なぜＥＵのオルタナティブとなるのか、今後、分析を進める必要のあることを記して、フロアからの批判と討論者の疑義への応答の一部とさせていただきたい。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（文責：鳴子博子）